

説 教 『人、男、女』山本 護牧師

聖 書 創世記 1:27~30/マルコによる福音書 8:29

岩波書店の創世記(月本昭男訳)はこう訳出されている。「神は自分の像(かた)に人を創造した。神の像にこれを創造した。彼らを男と女に創造した(創世 1:27)」。意味は新共同訳と違わないが「彼らを」という人称代名詞がある。この韻文を日本語の詩にしようとすれば、「彼らを」はいかにも野暮。が、言葉の意味を鮮明にするなら、「彼らを」は重要だ。すなわち「人(アダム)」とは元々、複数形だということ。創世記の原初物語は、「アダム」という名詞を、男と女のひと組で差し示している。

想像力を働かせると、男と女の異なる姿が見えて来る。たとえば蛇に唆されて禁止果実を食べる場面(3:6)。たいてい蛇に誘惑された女の愚かしさが説かれる。はたして、そうだろうか。男は、女と一緒に居て(3:6)一部始終を見ているのに抵抗なしに平然と食べている。女は「食べてはいけない、触れてはいけない、死んではいけない(3:3)」と抵抗している。神は「決して食べてはならない(2:17)」としたが、「触れてはいけない」とまでは言っていない。つまり女の言葉は、主体的な恐れの実現ではないのか。女は神の禁止命令と、自らの冒険心との相剋で逡巡した。男は無批判に、ただ流れに乗った。この場面の女と男、どちらが「人(アダム)」として意義あるかを虚心坦懐、考え直す必要がある。

うがった見方をすれば、教会は信徒個々の主体性を軽視し、教会が説く教えに唯々諾々従っていれば救われる、という考えが根底にあるのか。であれば「女」よりも「男」の方がよろしい、となるだろう。だがイエスは「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか(マルコ 8:29)」と問い、世論や権威(8:28)から独立した、個の主体性を重んじている。だから私たちは、「女」のようでありたい。

「神は彼らを祝福して言われた。〔産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ、海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ〕(創世 1:28)」。自然を「支配せよ」と命ぜられたキリスト教の思想が環境破壊をもたらしたと、まことしやかに言われることがある。深刻な環境破壊は、大規模農業による古代文明期に始まるが、「支配」にはその轍を踏まぬように、という戒めの響きを感じられる。「神はアダムに向かって言われた。〔お前は女の声に従い、取って食べるなと命じた木から食べた。お前のゆえに、土(2:6 アダム)は呪われるものとなった(3:17)〕」。土への環境破壊は「人」が引き起こすが、そうならぬよう「支配せよ」と戒めた。すなわち「支配」とは、「地の獣、空の鳥、地を這うものなど、すべて命あるものには青草を食べさせよう(1:30)」という神の御心に仕えることなのである。

私たちは「すべて命あるものが青草を食べる」環境を優先して考えたい。そこから原発や戦争、沖縄や日本の問題も見えて来よう。「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された(1:27)」。つまり「人」は、祖形である神の御心に仕えてこそ「人」となる。そして「全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木～があなたたちの食べ物となる(1:29)」。ところが木の実の中から禁止果実も食べ(3:6)、「人」は旅に出る(3:23)。エデンの園は母の胎の比喩であろう。「人」は生きるための皮の衣(3:21)と、自らを耕す労働(3:23)を与えられる。背いて冒険することもまた御心なのだ。



【おまけのひとこと】

神に仕え 神に背く これは「人」の生の裏表ではないのか 背くゆえに仕え 仕えるゆえに背く
仕える時 自然の食物が与えられる 背く時 自己を沃野にする試み(創世記 3:23)が与えられる